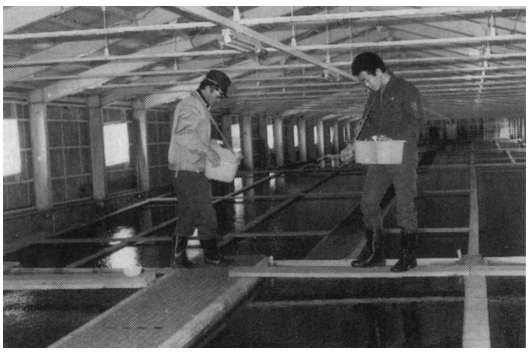
おけと ものがたり vol.73

木を植え魚を育てる

常呂漁協の取り組み



サケ・マス孵化場

常呂漁協が「よい水なくして豊かな漁場はない」との教訓を受けたのは、昭和20年代後半から30年代にかけてで、北見市でパルプ工場や製糖工場などの企業が進出し、常呂川の水が赤く濁り臭気まで放つようになりました。サケ・マスが回帰する命の川の常呂川が汚染によって生命が絶たれるということは、漁師生活に多大の影響を与える結果となることから「常呂漁協水質汚染防止対策漁民大会」を開いてデモ行進を行い、関係機関・関係工場に決議文を手渡して抗議しました。当時はまだ公害防止の規制が不十分であったので垂れ流し防止装置が完全に施されていませんでした。問題を重視した当時の網走支庁長が調停に入ってようやく調印が成立し、国も間もなく「公共用水域の水質の保全に関する法律」を制定しました。この結果汚染源となっていたパルプ工場は北見での操業を止め、紋別へ移転しました。しかし、常呂川の水質は幾分良くなったものの、汚れた川水が河口に流れてきていました。原因は都市化の進展に伴う生活雑排水や、大小家畜の糞尿流入であり、特に酪農家は経営規模が拡大されていく割には、環境への規制が厳しくなく対策は遅れがちでした。その後環境基本計画や湖沼水質保特別措置法などによって環境問題が厳しく規制されるようになりましたが、この間常呂漁協ではサケ・マスが遡上する常呂川上流に孵化場の建設を計画し昭和54年実現しました。ところが、大量の湧水が噴出して最適任地であったはずの元共栄の孵化場の湧水が減少しはじめました。周辺森林の伐採が進んで土地に保水力がなくなったためだと分かり、「捕る漁業から育てる漁業」を旗印にホタテ養殖に力を尽くしていた常呂漁協では、サケ・マスにおいても同様という視点から「水を守り育むことが、豊かな川と海を守り、大きな恵みをもたらす」として、孵化場周囲の荒地に、女性部が行事の一つとして植林作業を行うようになりました。「海辺にある漁協が、川の上流の山を買い取って森を育てている」とNHKが番組を作って放送しました。漁協組合長を先頭に女性部が大漁旗の下で１本１本丁寧に植樹していく光景が多くの人の目に止まり、平成３年漁協としては全国で初めて「朝日森林文化賞」が贈られました。その後は常呂川の支流やふるさとの源流地でサケが遡上する姿が見られようになりました。（参照『続置戸町史』）

ニューフェイスを紹介する みなさんこんにちは

緑川（みどりかわ） 一利（かずとし） さん

北海道警察
置戸駐在所長

【出身は】夕張市生まれ
【前任地】美深町恩根内
【ご家族は】妻と娘２人
【趣味】スキーと川釣り

【皆さんへ一言】雪深く寒かった前任地と比べて、冬は除雪が少し楽になりそうですね。川釣りは、ルアーでニジマスを釣るのが楽しみ。オホーツク管内に赴任するのは、網走市以来16年ぶりです。これからよろしくお願いします。

由利（ゆり） 瑞姫（みずき） さん

総務課
総務係兼職員係主事

【出身は】置戸町生まれで訓子府高等学校卒業
【ご家族は】母、祖母
【趣味】音楽鑑賞

【なぜこの仕事に】インターンシップの際、訓子府町役場の職員が町民と接している姿に感銘を受け、自分もなりたいと思いました。
【皆さんへ一言】自分のできることを、ひとつずつでも真摯に取り組んでいきたいです。